

令和元年6月5日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04329

研究課題名(和文)報酬分配と責任分配における幼児児童の公平観の発達と文化差に関する縦断・横断的研究

研究課題名(英文) Longitudinal and cross-sectional studies on the development and cultural differences of children's fairness judgments on distribution of rewards and responsibilities

研究代表者

橋本 祐子 (HASHIMOTO, Yuko)

関西学院大学・教育学部・教授

研究者番号：80228428

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「ごほうび」などの報酬の分配と「片付け・掃除」という責任の分配について、幼児・児童が公平と考える分配のパターンと、両場面における分配パターンの一貫性が年齢によってどう異なるかを調査した。5歳児時点と2年生時点の縦断調査では、分配パターンも両場面における一貫性も大きな変化はなかった。小学2・4・6年生を対象とした横断調査では、低学年ほど報酬を均等に、高学年ほど責任を利他的に分配した。しかし、両場面における一貫性には学年差はなく、場面による分配理由をさらに検討する必要が示された。また、文化による公平観の違いを検討する必要があり、国際比較研究のための体制づくりを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもが「ごほうび」などの報酬をどう分配するかに関する研究は多数あるが、責任の分配に関する発達研究は少なく、幼児期から児童期にかけての道徳性発達のプロセスを解明することにつながる。また、幼稚園・学校といった集団における片付け・掃除の分配については、保育者・教師の指導に関する研究はあるが、責任の分配に関する子どもの理解を明らかにした研究はわずかしかない。さらに、報酬の分配における文化差を示した研究はあるが、責任の分配における子どもの公平観の文化差についてはほとんど研究されていない。本研究は、子どもの公平観の発達および文化的背景を踏まえた教育実践を考える上で重要な示唆を与えるものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine how children's fairness judgments on reward and responsibility distributions develop and whether the consistencies of allocation patterns across two distribution contexts develop by age. A longitudinal study from 5-year-olds to second graders did not show significant age differences in allocation patterns nor in the consistencies. A cross-sectional study (second, fourth, and sixth graders) showed that more second graders allocated rewards equally and more sixth graders distributed responsibility altruistically. However, there was no age difference in the consistencies across reward and responsibility distributions and more studies are needed to examine the children's rationales for allocating different resources fairly. Another purpose of this study was to examine cultural differences on children's fairness judgments on distributions and collaborative relationships with international researchers were built for future comparative studies.

研究分野：発達心理学

キーワード：公平観 道徳性発達 分配的公正 責任分配

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

子どもが報酬(ごほうび等)をどのように分けるのかに関する発達研究は、幼児・児童の道徳性の発達を明らかにする研究テーマの一つとして、これまで国内外で多く行われてきた。これらの研究は、どのような分配方法を公平と考えるかが年齢によって異なることを示してきたが、近年では、それまで利己的とされてきた乳幼児でも公平な分配に敏感であることが明らかになっている。

これらの正(報酬)の分配に関する研究に対して、負の分配と考えられる責任(負担)の分配については、夫婦間の家事・子育ての分担、温室効果ガス削減負担の国家間での分配など、多領域で議論がなされているが、幼児や児童に関する発達研究は極めて少ない。また、幼稚園・学校といった集団における責任の分配に関する子どもの理解を明らかにした研究はごくわずかしかない。そこで、本研究の研究代表者の橋本と研究分担者の戸田は、幼稚園における「片付け」(使用した遊具などの共有物を整理整頓する責任を子どもが分担する日常的な活動)に着目し、責任の分配における幼児の公平観について研究を行ってきた。幼稚園・学校における片付けや掃除については、保育者・教師の指導に関する研究はあるものの、公平性の問題について子どもがどう理解し解決するかについては、橋本と戸田の研究が先駆してきた。

さらに、分配における幼児・児童の公平観の発達について、4つの比較軸(分配対象が報酬か責任か、子どもの年齢、被分配者間の関係、文化差)による検討を進め、報酬と責任の両場面においてどのような分配をするかを分析するため、4つの分配タイプ(均衡、均等、利己、利他)を用いた枠組を考案した。その分析方法を用いて行った調査から以下の点が明らかになった。4歳児と5歳児へのインタビュー調査では、報酬と責任のどちらの分配場面でも年少児よりも年長児に利他的な分配が多く見られたが、有意な年齢差はなかった。報酬と責任の両分配場面における分配ルールに一貫性が存在するかを分析した結果、4歳児より多くの5歳児が同じ分配ルールを適用したが、有意な年齢差は見られなかった。ギリシャの幼児を対象とした片付け(責任)の分配における公平観の予備的調査では、自己関与の影響と分配理由に日本の幼児との違いが見られた。

以上のような研究結果から2点の研究課題が明らかになった。これまでは幼児を対象とした調査のみであったため、幼児期から児童期にかけて子どもの分配における公平観がどのように発達するのかをさらに検証する必要がある。報酬と責任分配の両場面における幼児・児童の公平観が国や地域によって異なるのかを比較検討する必要がある。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、「ごほうび」などの報酬の分配と「片付け」という責任の分配に関する公平観の発達について、子どもがどう分配することが公平と考えるかを調査し、道徳的発達の一側面の様相を解明することである。(A)国内においては、報酬と責任分配の両場面における公平観が、幼児期から児童期にかけて、どのように発達するかを明らかにする。(B)国外においては、報酬と責任分配の両場面における公平観が、国や地域によってどのように異なるかを比較検討することを目的とする。

### 3. 研究の方法

(A)-1 自他間における報酬と責任の分配に関するインタビュー調査(縦断的研究)

調査協力児: Time 1(幼稚園年長児 5-6歳)と Time 2(小学2年生 7-8歳)同じ協力児 40名

質問内容:

報酬分配:自分と友だちが協力してクラス全体のために製作物を作る2つの場面(製作物を自分が多く完成した、または相手が多く完成した)を提示し、各場面において(a)自分にごほうびを多くもらう、(b)相手にごほうびを多くもらう、(c)2人がごほうびを同じだけもらうという選択肢から「どう分けるか」を選び、その理由を答える。

責任分配:自分と友だちがクラスの共有遊具を使う2つの場面(自分だけが遊具を使って遊んだ、または相手だけが遊具を使って遊んだ)を提示し、各場面において(a)自分だけが片付ける、(b)相手だけが片付ける、(c)2人で一緒に片付けるという選択肢から「どう片付けるか」を選び、その理由を答える。

(A)-2 自他間における報酬と責任の分配に関する質問紙調査(横断的研究、縦断的研究)

調査協力児: Time 1(小学2年生 99名、4年生 102名、6年生 97名)、Time 2(小学3年生 100名、5年生 99名)、Time 3(2019年度予定)同じ協力校の学級で実施。

質問内容: (A)-1と同様の内容の質問紙を用いて質問した。

(A)-3 学級および学校における片付け・掃除に対する児童の態度と意識に関する質問紙調査(横断的研究)

調査協力児: 小学2年生 99名、4年生 102名、6年生 97名。

質問内容:

学校における共有物の片付けの責任の共有:自分とクラスの友だちが図書室で読書をし、本が散らかった状態の場면을提示する。片付けの時間になり自分1人だけが残った時にどうするかを質問し、(a)1人で全部の本を片付ける、(b)自分が読んだ本だけ片付ける、(c)片付けをしない、

という選択肢から答えを選ぶ（教師がその場にいる場面といない場面の2場面について質問する）。

片付けに対する態度：片付けに関する考えを質問し、(a)片付けをすることは面倒くさい、(b)面倒くさくない、(c)どちらでもない、という選択肢から答えを選ぶ。

実際の学校場面における掃除に対する児童の意識：自分の学級または学校の児童の責任の共有について質問し、(a)みんな頑張って掃除をしている、(b)頑張っていない人もいる、(c)どちらでもない、という選択肢から答えを選ぶ。

掃除の分配の不均衡に対する意識：掃除当番が掃除を頑張っていない人に対する考えを質問し、(a)ちゃんとやってほしいと思う、(b)やりたくない人はやらなくてもいいと思う、(c)どちらともいえない、という選択肢から答えを選ぶ。

(B)-1 国際共同研究の基盤づくり：香港教育大学に招聘され、幼児期の道徳性発達に関する研究成果について、大学内でのセミナーにおける講演および大学主催の学会における基調講演を行い、複数の研究者と研究交流をした。

(B)-2 国際比較研究に向けた研究協力体制づくり：国際学会において、「Moral judgment and prosocial behavior in children and young adolescents」というテーマのシンポジウムに参加し、「正と負の分配における幼児・児童の公平観の発達：2場面における分配パターン」という題目で研究成果を発表した。ポーランドの研究者との研究交流を通して、国際比較研究に向けた協力体制づくりを行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) 報酬と責任の両分配場面における幼児期から児童期にかけての公平観の発達

2時点（5歳児と小学2年生）において同じ子ども40名にインタビュー調査した縦断的研究である。報酬分配では72.5%の2年生が均等タイプであり、そのうち32.5%が他のタイプから均等タイプに変化した。責任分配では均等タイプと利他タイプの数が増え、2時点での変化が見られなかったが、9名が他のタイプから利他タイプへ、8名が利他タイプから他のタイプへ変化した（図1）。

両場面において分配タイプが一貫していた人数は、1時点より2時点の方が少なかった（表1）。また、「一貫しない」から「一貫する」に変化した子どもと、その逆の変化を見せた子どももいた。このことは、発達とともに異なる場面における分配ルールの適用が増えるとは言えないことを示唆する。今後はさらに児童期を通してどのように発達していくかをさらに検証する必要がある。

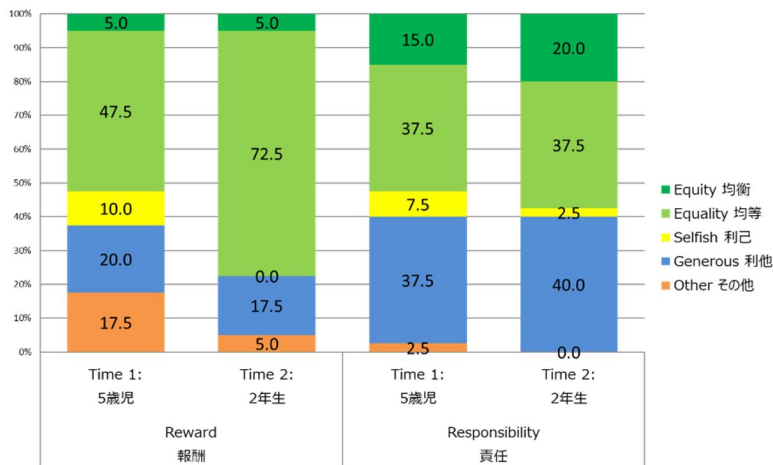


表1 両場面での分配タイプが一貫していた人数

報酬分配	責任分配	Time 1 5-6歳	Time 2 7-8歳
均衡タイプ		2	0
均等タイプ		15	11
利己タイプ		0	0
利他タイプ		8	1
合計		26	12

図1 報酬と責任の各分配場面における2時点での分配タイプの割合

##### (2) 報酬と責任の両分配場面における児童の公平観の発達

小学2年生99名、4年生102名、6年生97名に質問紙調査をした横断的研究である。（本調査は3時点で行う縦断的研究としても進めている。）報酬分配では、すべての学年で均等タイプが多く、低学年ほどその傾向が見られた。責任分配では、すべての学年で利他タイプが多く、高学年ほどその傾向が強く見られた。両分配場面において、均衡タイプは高学年ほど多く見られた（図2）。

両分配場面において分配タイプが一貫していた割合は、2年生で39.4%、4年生で41.2%、6年生で37.1%であった（図3）。(1)の結果と同様に、異なる場面における一貫した分配ルールの適用は、年齢が上がるほど増えるとは言えない。このことは、児童が論理的に一貫したルールを異なる場面に適用するのではなく、異なる文脈において多様な理由づけをしながら適用するルールを選択している可能性があることを示唆する。今後はさらに、児童がどのような理由づけに

よって報酬と責任を分配するのかを分析し、発達の道筋を探究する必要がある。

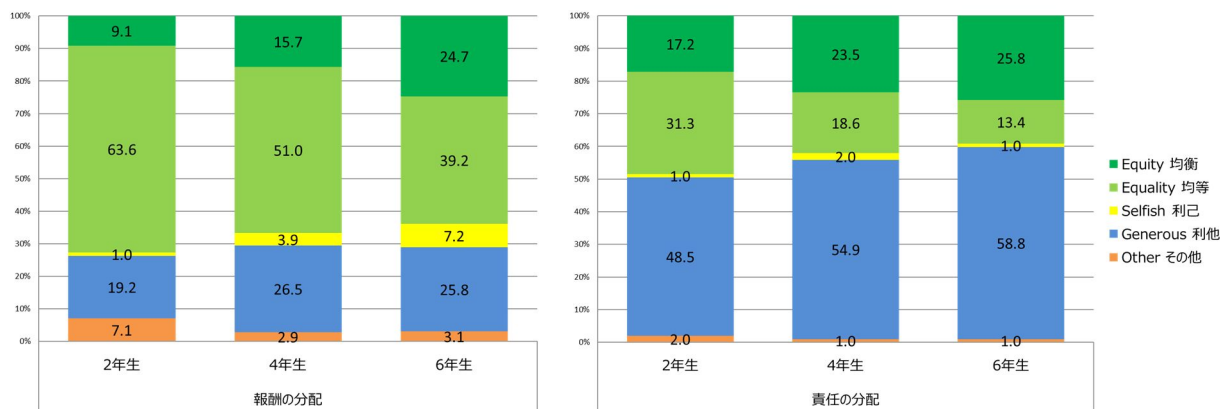


図2 報酬と責任の各分配場面における各学年の分配タイプの割合

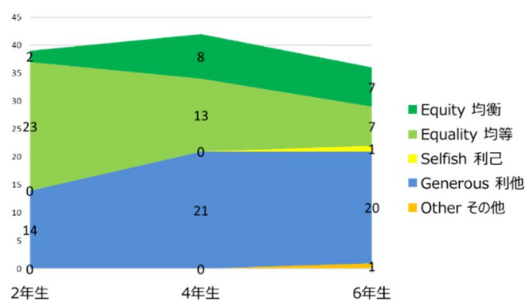


図3 各学年における報酬と責任の両分配場面での分配タイプが一貫していた人数

### (3) 学級および学校における片付け・掃除に対する児童の態度と意識

小学2年生99名、4年生102名、6年生97名に、自分の学級および学校における片付け・掃除という責任の共有と分配についてどのような態度と意識をもつかについて質問した探索的研究である。クラスの友だちと図書室で読書をした後、自分1人だけがその場に残った状況で、79.9%（教師がいる場合）と78.5%（教師がいない場合）の児童が1人ですべての本を片付けると答え、教師がいる場合での回答は2年生に多く見られた。また、自分が読んだ本だけ片付ける（個人の責任）と答えた児童は全体的に少なかったが、その傾向は6年生により強く見られた。これらのことから、ほかの学年と比べ、2年生がより規範に従う傾向があることが示唆された。

実際の学校場面における掃除について、自分の学級では「頑張っていない人もいる」（41.3%）、学校全体では「どちらでもない」（37.2%）という回答の割合がほかの回答より高かった。また、掃除を頑張っていない人には「ちゃんとやってほしいと思う」（63.4%）という回答が多かった。これら3つの質問の回答に有意なジェンダー差は見られなかった。家事分担における不公平感に関する先行研究や、学校における掃除の分担に関する実践記録等ではジェンダー差が報告されていることから、発達の過程において、どのようにジェンダーによる公平観の違いが見られるようになるのかを今後も調査していく必要がある。掃除を頑張っていない人に対する期待について、学年による有意な差が見られた。より多くの2年生（84.5%）と少ない6年生（42.3%）が「ちゃんとやってほしいと思う」と回答し、対照的に「やりたくない人はやらなくてもいいと思う」「どちらともいえない」と回答した割合は6年生で高く、2年は低かった。さらに、実際の学校場面における掃除についての意識と、掃除をしない人に対する期待の関連に学年による違いが見られた。つまり、2年生は学校場面での意識の違いに関係なく、掃除を頑張っていない人には「ちゃんとやってほしい」と回答したのに対して、「みんな頑張って掃除をしている」という意識をもつ6年生が掃除を頑張っていない人に「ちゃんとやってほしいと思う」と回答し、「頑張っていない人もいる」という意識をもつ6年生は、「やりたくない人はやらなくてもいいと思う」または「どちらともいえない」と回答する傾向にあった。このことは、2年生は相手に関係なく掃除の責任は共有するべきという公平ルールを適用し、6年生は社会的な比較対象によって公平性を判断している可能性を示唆している。発達とともに公平判断がどのように変化していくかについて、さらに探究する必要がある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

HASHIMOTO, Yuko, & TODA, Yuichi (2019). Young children's fairness judgements on the distribution of rewards and responsibilities: allocation patterns and consistencies across two kinds of distribution. *Early Child Development and Care*, 査読有, 189(7), 1051-1062.

DOI:10.1080/03004430.2017.1362402 (2017年にオンライン掲載)  
NAMEDA, Akinobu, HASHIMOTO, Yuko, & TODA, Yuchi (2018). Children's attitudes toward and perceptions about sharing the responsibility of clean-up: A exploratory study in a Japanese elementary school. The Japanese Journal of Educational Practices on Moral Development, 査読有, 12(1), 17-24.

[学会発表](計8件)

HASHIMOTO, Yuko, NAMEDA, Akinobu, & TODA, Yuchi (2019). Development of elementary school students' fairness judgments on distribution of positive and negative resources. 2019 Society for Research in Child Development Biennial Meeting (アメリカ合衆国 ボルティモア)

HASHIMOTO, Yuko, & TODA, Yuichi (2018). Development of children's fairness judgments on distribution of positive and negative resources: Allocation patterns across two kinds of distribution. The 25th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development (オーストラリア ゴールドコースト)

橋本祐子、戸田有一 (2018). 正と負の分配における公平判断 幼児・児童が報酬と責任をどう分けるか . 日本発達心理学会道徳性・向社会性分科会企画ラウンドテーブル(話題提供者) 日本発達心理学会第29回大会, 東北大学川内北キャンパス(宮城県仙台市)

HASHIMOTO, Yuko, TAKEMOTO, Maki, & TODA, Yuichi (2017). Development of children's fairness judgments on distribution of rewards and responsibilities. The 18th European Conference on Developmental Psychology (オランダ ユトレヒト)

HASHIMOTO, Yuko (2017). Promoting children's social, emotional and moral development in Japanese early childhood classrooms. Conference for Research in Early Childhood Education. 香港教育大学(香港)招待講演

HASHIMOTO, Yuko (2016). Fostering social and moral development in Japanese early childhood classrooms. DRDC Research Seminar at The Education University of Hong Kong. 香港教育大学(香港)招待講演

HASHIMOTO, Yuko, & TODA, Yuichi (2016a). Young children's fairness judgments on distribution of rewards and responsibilities: Developmental trends during preschool years. 2016 Hong Kong International Conference on Education, Psychology and Society (香港)

HASHIMOTO, Yuko, & TODA, Yuichi (2016b). Young children's fair distribution of work responsibilities: Sharing with friends, acquaintances, and strangers in first-person contexts. The 31st International Congress of Psychology, パシフィコ横浜(神奈川県横浜市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名: 戸田 有一  
ローマ字氏名: TODA, Yuichi  
所属研究機関名: 大阪教育大学  
部局名: 教育学部  
職名: 教授  
研究者番号(8桁): 70243376

研究分担者氏名: 滑田 明暢  
ローマ字氏名: NAMEDA, Akinobu  
所属研究機関名: 静岡大学  
部局名: 大学教育センター  
職名: 講師  
研究者番号(8桁): 00706674

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。